

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 5 月 11 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370855

研究課題名(和文)戦後ユダヤ世界の形成とパレスチナ問題の「否・解決」 - 学際的研究をめざして

研究課題名(英文)The Formation of the Post-War Jewish World and the Palestine Question

研究代表者

野村 真理 (NOMURA, MARI)

金沢大学・経済学経営学系・教授

研究者番号：20164741

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：

戦後ユダヤ世界の形成とパレスチナ問題の連関を、ヨーロッパからパレスチナへの人・モノ・カネの流れに着目して検証した。

野村はイスラエルに大量のユダヤ人移民を送り出したルーマニアについて、その歴史的背景を解明し、武井は、ドイツの対イスラエル補償ならびに国家的軍事支援の実態をドイツ、イスラエル双方のリアルポリティクスの観点から分析した。金城は、パレスチナ人の視点からイスラエル建国の問題点を検証した。

研究成果の概要(英文)：This research project examined the historical linkage between the formation of the Jewish world in the post-WWII era and the birth of the Palestine Question, by analyzing the flows of human resources, goods, and capital.

Nomura focused on the case of Romania, from which a large number of Jewish immigrants were shipped to Israel, and clarified its historical background. Takei analyzed the German reparations and the military aid to Israel from the standpoint of real politics. Kinjo demonstrated problems pertaining to the establishment of the State of Israel from the perspective of the Palestinian people.

研究分野：人文学

キーワード：戦後ユダヤ人 パレスチナ問題

## 1. 研究開始当初の背景

ユダヤ人に関する研究は、ホロコーストの前後で大きく断絶する。

西洋史におけるホロコースト研究の関心は、戦中、ユダヤ人殺害者であるナチの意図や組織、あるいは犠牲者であるユダヤ人の苦難や抵抗に集中するが、戦後はユダヤ人が姿を消し、関心はドイツにおけるナチ時代の過去との取り組みの実践や記憶の問題に移行する。他方、戦後ユダヤ人の研究は主として中東研究に移り、そこで突如として現れるのは、パレスチナ人を抑圧する加害者としてのユダヤ人である。

こうした研究の断絶や、ユダヤ人に対する犠牲者から加害者への認識の飛躍は、ホロコースト前後のユダヤ世界を架橋する歴史研究が少ないことに由来する。ホロコーストを契機にイスラエルが誕生したという因果関係自体は半ば自明とされながら、ホロコースト前後のユダヤ世界が具体的にどうつながっているのか、それを実証的に検証する研究は行われてこなかった。

## 2. 研究の目的

上記のような背景のもと、本研究は、戦後イスラエルの建国とその安全保障に貢献したのは、ホロコースト後にヨーロッパで行き場を失ったユダヤ人 DP (Displaced Persons) のパレスチナへの移住という人の移動と、ホロコースト犠牲者に対するドイツの戦後補償におけるカネとモノの移動であったことに着目し、次の(1)(2)を研究目的とした。

(1)戦後ルーマニアは、ポーランドに次いで大量のユダヤ人をパレスチナ/イスラエルに送り出したが、日本では研究が皆無に近いルーマニアのホロコーストに着目してその歴史的経緯を明らかにすること。パレスチナ/イスラエルに渡ったユダヤ人 DP の戦略的入植と定住状況を精査すること。

(2)ドイツ、アメリカ等から様々な形でイスラ

エルに流れたカネとモノが、イスラエルにおいていかに受け入れられ、利用されたのか、とくにパレスチナ人の土地収容や軍備拡張との関係において明らかにすること。

本研究がめざしたのは、(1)と(2)により、戦後欧米によるホロコーストの清算のあり方が、戦後ユダヤ世界の形成とパレスチナ問題発生に密接に関係することを明らかにすることであった。

## 3. 研究の方法

研究方法は、実証に重点をおき、第1次史料の発見と収集、その読解を中心とした。

研究体制は、研究目的(1)をおもに野村が、研究目的(2)をおもに武井が担当し、戦後パレスチナ研究を専門とする金城は、パレスチナ人の視点から(1)(2)の双方にかかわることとした。

年次ごとの研究計画として、当初は、1年目は3人が個別に史料・資料の収集と読解を進め、2年次に3人がエルサレムに集合して、ヘブライ語、アラブ語が堪能な金城のサポートを得つつ共同で現地図書館等での史料収集を行い、3年目に研究成果をまとめる予定であった。しかし、次の「研究成果」欄で述べるように、想定外のやむを得ざる事情によって2年目の現地史料調査が実現せず、研究計画の立て直しと研究の最終目標の変更を余儀なくされた。

## 4. 研究成果

研究目的欄で述べたように本研究の特色は、戦後ヨーロッパおよびアメリカからパレスチナ/イスラエルにわたった人、モノ、カネについて、戦後ヨーロッパおよびアメリカからの送付と、パレスチナ/イスラエルにおける受け入れ状況の2面から解明することに求められた。

ところが の面を調査するため、2年目に研究代表者と分担者の3人で実施する予定であったイスラエルでの資料・史料調査と収

集が実現できなかった。その理由は、乳幼児を含め2人から3人の子供たちを抱える家庭の事情で、大学の夏季休業中に身動きができなくなったことによる。イスラエルでの資料・史料調査にはヘブライ語、アラブ語ともに堪能な金城の参加が不可欠だが、夏季休業中をはずすと金城と他の2名の都合を合わせることも困難であった。若手女性研究者の場合はこのような「事情」の発生は珍しいことではなく、理解が必要である。そこで研究計画を立て直し、<sup>1</sup>については研究を先送りとし、本研究に認められた3年の研究期間中は<sup>2</sup>に集中して研究成果を出すことにした。

その結果、野村は当初の予定通り、戦後パレスチナ/イスラエルに対し、ポーランドに次ぐ大量のユダヤ人移民を送り出したルーマニアに着目し、ホロコーストに遡るその歴史的経緯を明らかにした(研究業績欄、雑誌論文<sup>3</sup>と<sup>4</sup>の「ルーマニアとホロコースト」前篇・後篇)。ルーマニアのホロコーストの特徴は、ホロコーストが戦後ルーマニアにとっては外国領となるブコヴィナやベッサラビアのユダヤ人口を消滅させた一方、アントネスクが旧王国領のユダヤ人の絶滅収容所への移送を拒否したため、戦後ルーマニアには30万人以上という、ヨーロッパ諸国のなかでは最大規模のユダヤ人口が生き残ったことにある。戦後ルーマニアは、デジに続くチャウシェスク時代、ソ連やヨーロッパの旧社会主義諸国とは一線を画する民族共産主義路線をとり、イスラエルと外交関係を維持した例外的な国家だが、このホロコーストを生き残ったルーマニア・ユダヤ人がイスラエルへの移民となっていった。日本では、ルーマニアの近現代史研究者はきわめて少なく、ホロコースト研究はほとんど皆無であることを考えれば、上記<sup>3</sup>と<sup>4</sup>は意味ある研究成果になったと思われる。

武井は、とくに戦後ドイツからホロコースト犠牲者に対する戦後補償としてイスラエ

ルにわたったカネとモノに着目し、研究期間最終年に著書『<和解>のリアルポリティクス』(研究業績欄、図書<sup>5</sup>)をまとめた。日本でも、戦後日本との比較から戦後ドイツにおける過去との取り組みの実践に対する研究関心は高く、戦後補償の仕組みを論じた研究も少なくないが、他方で補償先であるイスラエルに関しては、ホロコーストの執行者であるドイツから「血の付いたカネ」を受け取ることに対し、死者に対する冒瀆であるという激しい反発や非難があったことはあまり知られていない。武井の研究の画期性は、当時のイスラエルの首脳部がこうした世論の反発を押さえ込み、イスラエルの社会的、経済的、軍事的インフラの整備、補強のため、まさしくリアルポリティクスの立場から補償を受け入れた経緯を明らかにしたことに求められる。

野村、武井の視点がユダヤ人にあるのに対し、金城は、ヨーロッパからの大量の人、モノ、カネの流入に見舞われたパレスチナで、パレスチナ人が陥った混乱、困難を明らかにした(特に研究業績欄、図書<sup>6</sup>所収の論文「パレスチナ問題をめぐる語りの変容」ならびに学会発表<sup>7</sup>)。

最後に、3年の研究期間中に実現すべき具体的な研究目的とは別に、本研究の最終目標は、ホロコースト後ヨーロッパとパレスチナ問題の双方を視野に収めた戦後ユダヤ世界の形成を検証することにより、これまで別個に行われてきた前者の西洋史研究と後者の中東研究を架橋することにおかれた。これについては、ヨーロッパ・ユダヤの研究者と中東研究者の双方を登壇者とし、2014年に日本ユダヤ学会でシンポジウム「イスラエルの内なる他者――イスラエル・アラブとユダヤ人社会」を企画、実現し、2017年には、同じく日本ユダヤ学会でシンポジウム「現代イスラエルの課題」を開催する予定である。

また本研究課題申請時の研究計画書に記

したとおり、野村と武井が日本でトップクラスの中東研究者である臼杵陽氏や長沢栄治氏主催の学会、研究会に、金城がユダヤ関係の学会、研究会に参加することにより、ヨーロッパ・ユダヤの研究者と中東研究者のあいだで貴重な人間関係を構築することができた。今後、共同研究に発展させたい。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計9件)

金城美幸、「虐殺」の物語の奥行き シヤリーフ・カナーアナ・ニハード・ゼイターウィー著『デイル・ヤーシーン』(破壊されたパレスチナ村落シリーズ No.4)の解題と翻訳、東京大学東洋文化研究所紀要、査読無、171冊、2017、114-188。

野村真理、ホロコーストとルーマニア(後篇)、金沢大学経済論集、査読無、36巻、2号、2016、5-44。

野村真理、ユダヤ人ネットワークの実像と虚像、東欧史研究、依頼原稿、38巻、2016、73-79。

武井彩佳、アフターマティプ・アクションの政治、ドイツ史研究、査読無、50巻、2016、1-16。

野村真理、ホロコーストとルーマニア(前篇)、金沢大学経済論集、査読無、36巻、1号、2015、1-33。

金城美幸、イスラエル建国以前の労働シオニズムにおける「民族共生論」の役割、アジア・アフリカ研究、査読有、55巻、3号、2015、22-47。

野村真理、ナチ支配下ウィーンのユダヤ人移住におけるウィーン・モデルとゲマインデ、ユダヤ・イスラエル研究、査読有、28巻、2014、24-34。

武井彩佳、強制移住と財産移転、現代史研究、査読有、60巻、2014、1-19。

武井彩佳、偽証との向き合い方、修正主義

の受け止め方、シノドス、査読無、2014.10.28、2014、1-3。

[学会発表](計6件)

武井彩佳、和解のリアルポリティクス、歴史人類学会、筑波大学東京キャンパス(東京都文京区)、2016.11.16。

金城美幸、村民たちの口述語りから見たデイル・ヤーシーン村、関西パレスチナ研究会、キャンパスプラザ京都(京都府京都市)、2016.11.5。

金城美幸、歴史が書き換えられるとき、日本平和学会秋季大会、アールプラザ広島(広島県広島市)、2015.7.18。

金城美幸、イスラエル以前の労働シオニズムにおける民族共生論再考、日本中東学会第31回年次大会、同志社大学(京都府京都市)、2015.5.17。

野村真理、ユダヤ人ネットワークの実像と虚像、東欧史研究会大会、大正大学(東京都豊島区)、2015.4.25。

野村真理、満洲 ロシア人・ユダヤ人・日本人の交錯、第64回日本西洋史学会大会、立教大学(東京都豊島区)、2014.6.1。

[図書](計7件)

武井彩佳、みずず書房、<和解>のリアルポリティクス、2017、279。

Nomura Mari, Yuu Nishimura (ed.), Kanazawa University, Yiddishism and Creation of the Yiddish Nation, 2017, 205.

野村真理 他、岩波書店、ユダヤ人と自治、2017、245-269。

武井彩佳 他、彩流社、ヨーロッパ史のなかの思想、2016、330-360。

金城美幸 他、ミネルヴァ書房、中東の新たな秩序、2016、124-148。

金城美幸 他、明石書店、パレスチナを知るための60章、2016、99-103。

野村真理 他、岩波書店、第一次世界大  
戦・第4巻・遺産、2014、105-128。

## 6 . 研究組織

### (1)研究代表者

野村 真理 (NOMURA, Mari)  
金沢大学・経済学経営学系・教授  
研究者番号：20164741

### (2)研究分担者

武井 彩佳 (TAKEI, Ayaka)  
学習院女子大学・国際文化交流部・准教授  
研究者番号：40409579

金城 美幸 (KINZYO, Miyuki)  
東京大学・東洋文化研究所・研究員  
研究者番号：80632215